

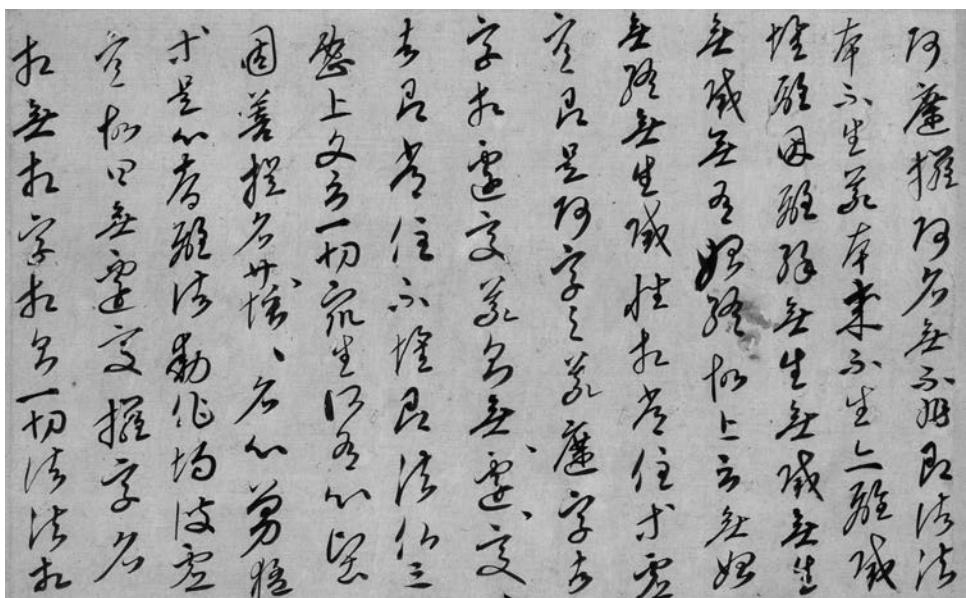
## 出品作品リスト

No	作品名	作者名・産地	品質	時代世紀
1	赤地蓮華文錦幡		絹製、錦織	室町時代 15世紀
2	火舎香炉		青銅製鍍金	平安時代 嘉曆2年(1170)
3	五鈷鉢		青銅製鍍金	鎌倉時代 13-14世紀
4	前期 ◎ 書状 淑通教授宛	道潛(?-1106?)	紙本墨書	北宋時代 11-12世紀
5	後期 ◎ 送別偈 幽禪人宛	古林清茂(1262-1329)	紙本墨書	元時代 泰定3年(1326)
6	経筒		青銅製	平安時代 元永元年(1118)
7	仏頭		塑造	奈良時代 8世紀
8	光背化仏		木造、漆箔	奈良時代 8世紀
9	◎ 金剛般若經開題残巻	空海(774-835)	紙本墨書	平安時代 9世紀
10	王子形水瓶		佐波理製	奈良時代 8世紀
11	二月堂練行衆盤	蓮仏(生没年不詳)	木胎漆塗	鎌倉時代 永仁6年(1298)
12	唐物肩衝茶入 銘「松永」		陶器	明時代 15-16世紀
13	高麗雨漏茶碗		陶器	朝鮮王朝時代 15-16世紀
14	如来立像		青銅製鍍金	統一新羅時代 8-9世紀
15	◎ 菩薩半跏像		青銅製鍍金	白鳳時代 7-8世紀
16	日課觀音図	伝・源実朝(1192-1219)	紙本墨画	鎌倉時代 13世紀
17	古唐津茶碗 銘「老鶴」	唐津焼	陶器	桃山時代 16世紀
18	絵因果経断簡		紙本着色	鎌倉時代 13世紀
19	根来葉器		木胎漆塗	南北朝時代 14世紀
20	珠数文蒔絵八角沈箱		木胎漆塗	南北朝時代 14世紀

## 茶道具としての仏教美術

会期 2020年11月17日(火)-2021年1月31日(日)

会場 松永記念館室



出品No.9 空海筆 金剛般若經開題残巻

茶道具の中には、本来、茶の湯とは別の目的で制作されたものが少なくありませんが、仏教美術はその代表ともいえます。祈りのために作られた仏教美術がどのようにして茶の湯で用いられるようになったのか?歴史を紐解きながら両者の関わりを探ります。

## 仏教と茶

茶が日本にもたらされたのは平安時代の初め頃、最新の文化を求めて唐へ渡った僧侶によってであったといわれます。ただし、当時の貴族たちの間に喫茶の習慣はなかったらしく、茶が消費されたのは祖師の供養や国家安泰を祈る儀礼など仏教の法会の場が中心だったようです。

古来、茶は単なる飲み物ではなく、不老長寿をもたらす薬と考えられてきました。これを良く示すのが、北斗七星を祀る密教修法である北斗法です。

真言宗の僧侶・覚禪（1143—?）が編纂した図像集（様々な仏の姿かたちや修法の次第を集成したもの）『覚禪鉢』には北斗法を修する際の供養檀の設えが図示されています。それによると、堂内を飾る幡（作品1）や、香炉（作品2）五鈷鉢（作品3）など密教修法に定番の仏具に加えて、錢や菓子、そして、茶が用いられたようです。同書は、その理由として茶が仙薬であることをあげており、ここから茶が単なる飲み物ではなく、神仙への供物と認識されていたことが分かります。ちなみに、当時の茶の飲み方は茶葉をつき固めた固形茶（餅茶または団茶）が主流であったと考えられています。

粉末にした茶（抹茶）に湯を注いで飲むという、我々にも馴染み深い喫茶法（点茶法）が成立したのは、中国・宋時代のこと、これを鎌倉時代の禪僧・栄西（1141—1215）が日本へもたらすに及び、当地でも本格的に喫茶の風習が定着することとなります。

このように、茶は伝来当初より仏教、特に鎌倉時代以降は禪宗と深い関わりを持っていましたが、16世紀を通して茶の湯文化が大成される中で両者の関わりは更に決定的なものとなりました。

すなわち、侘茶を大成した千利休（1522—1591）の高弟である山上宗二（1544—1590）が著した『山上宗二記』には、「茶湯は禪宗より出でたるに由りて、僧の行いを専らにす。珠光、紹鷗、悉く禪宗なり。」あるいは「道陳、宗易は禪宗を眼とす。」とあり、茶の湯の大成に功績のあった珠光（1423—1502）、武野紹鷗（1502—1555）、北向道陳（1504—1564）、千利休（宗易）といった茶人はみな禪の精神を基調にして自らの茶風を作り上げたといいます。

こうした認識は茶の湯の隆盛と共に深められていき、江戸時代に至ると茶と禪とは、人間形成を目指す点で道を同じくしているとする「茶禪一味」の説が定着するようになります。禪僧の書である墨蹟（作品4、5）

が茶席の掛物として最上であるという考え方もこの「茶禪一味」の思想によって広まったといわれます。

また、茶の湯において、本来ほかの用途の為に作られた器物を茶道具に取り上げる「見立て」は、茶人の創意を示すものとして重んじられました。この見立ては仏教美術にもしばしば適用され、経巻を納める容器であった経筒（作品6）を花入に転用しているのはその好例といえます。

## 近代数寄者と仏教美術

このように、古来、仏教と茶には深い関わりがあり、茶の湯において仏教美術が用いられることが珍しくはありませんでした。一方で、祈りの対象となる仏像や仏画といった仏教美術の中核をなす作品が茶道具に用いられることがなかったことにもあわせて注意を払う必要があるでしょう。こうした状況に大きな変革をもたらしたのが、近代の到来でした。

明治元年（1868）の明治維新により、250年以上にわたって続いてきた幕藩体制が崩壊し社会はおおいに混乱しました。仏教寺院もこうした変革の波にさらされることになりますが、とりわけ、神仏分離令に端を発する廢仏毀釈によって大きな打撃を受けました。それまで信仰の対象として尊崇をうけていた仏像や仏画が強制的にその場から引きずり降ろされることになったのです。

こうした事態を重く見た明治政府は「古器旧物保存方」（明治4年〈1871〉）、「古社寺保存法」（明治30年〈1897〉）など、今日の文化財保護法に連なる施策を打ち出します。その結果、仏像や仏画は、近代国家のアイデンティティを支える歴史遺物として、そして、ヨーロッパ文明を象徴するギリシア・ローマの彫刻やルネサンスの絵画に比肩しうる美術作品としての新たな役割を担うことになります。

和辻哲郎が大正8年（1919）に著した『古寺巡礼』において「われわれが巡礼しようとするのは『美術』に対してであって、衆生救済の御仏に対してではないのである。たとひわれわれが或る仏像の前で、心底から頭を下げたい心持になつたり、慈悲の光に打たれてしみじみと涙ぐんだりしたとしても、それは恐らく仏教の精神を生かした美術の力に参ったのであって、宗教的に仏に帰依したというものではなかろう。」と述べているのは、当時の仏像に対する認識を端的に示すものといえるでしょう。ともあれ、このような社会情勢や人びとの価値観の変化が、仏像や仏画が茶道具の

世界に参画する上での前提条件となったことは間違いません。

いうまでもなく、明治維新は茶の湯の世界にも大きな影響を与えました。幕藩体制に依存していた大名家は経済基盤を喪失し、彼らの庇護を受けていた茶家は失業の憂き目にあいます。その一方で、近代数寄者と呼ばれる新たなスタイルの茶人が登場します。彼らは主に新興の財界人であり、その潤沢な資金力で名品を蒐集していきます。折しも、廢仏毀釈によって寺院から仏像や仏画が市場へ流出していたころであり、近代数寄者たちはこぞってこれを求めたのです（作品7、8）。

彼らは見立ての精神をおおいに發揮して、従来茶道具として用いられることがなかった仏教美術を自身の茶に取り込みました。それを象徴する茶会に、近代数寄者の世界で中心的な役割を果たした益田鈍翁（1848—1938）が創始した大師会があります。鈍翁は明治28年（1895）弘法大師・空海の書である「崔子玉座右銘断簡」を入手したことを記念して空海の命日に法要を設けることとし、翌29年3月21日に第1回を挙行しました（大師会という名称が登場するのは第4回から）。その後、回を重ねる中で法要としての性格は薄れ、数寄者自慢のコレクションを披露する茶会へと変化していきますが、道具の趣向は極めて仏教色の強いものでした。

時代はすっとくだって昭和33年（1958）、松永耳庵も大師会にて一席を担うことになりますが、その際にも空海筆の《金剛般若經開題残卷》（作品9）など、仏教美術を中心とした道具組みでこれに臨みました（作品9—13）。

関東の財界人を中心とした大師会は、西の光悦会とともに数寄者界における二大茶会として有名ですが、この大師会が故人の冥福を祈る追善の法会としての性格を有していたことは見逃せません。というのも、松永耳庵の茶事を例に仏教美術の用い方を眺めてみると、単なる鑑賞美術として展示に供されることもありましたが（作品14、15）、祈りの縁としての役割を期待されることもあったからです。

以下に紹介するのは、小林逸翁（1873—1957、作品16、17）、式守蝸牛（1875—1946、作品18—20）の追善茶会の席で耳庵が用いた茶道具です。特に注目されるのは、《日課觀音像》（作品16）、《繪因果經斷簡》（作品18）といずれも仏教美術を茶掛に用いていることでしょう。小林逸翁は、実業家、茶人として活躍した人物で、耳庵も自身の著作で親友として

名をあげるほど深く交わりました（「ハメをはずせぬ小林一三」『可笑しけりや笑え』）。また、式守蝸牛は当代随一の茶匠で、多くの近代数寄者の指導にも携わった人物です。耳庵とも深く交わったようで、式守蝸牛の追悼文集に寄稿した際には、「頭から、足の爪さきまで侘の、すっきりした茶人」と最大級の賛辞を送っています（「侘茶の神髄」『楓の昔』）。

このような生前親しく交わった人物を偲ぶ茶会において、仏教美術を用いたのは故人の冥福を祈る真摯な思いがあったからに違いありません。

明治維新を経て、仏教美術は祈りの対象としての立場を追われたようにもみえましたが、心ある茶人たちによって再びその役割を取り戻したということができるのでないでしょうか。

## 主要参考文献

- ※2階の美術情報コーナーで閲覧可能な書籍を中心にあげます。
- ・『山上宗二記 天正十四年の眼』五島美術館、1995年
  - ・『鈍翁の眼 益田鈍翁の美の世界』五島美術館、1998年
  - ・『没後30周年記念特別展 松永コレクション展』福岡市美術館、2001年
  - ・『日本人と茶—その歴史・その美意識—』京都国立博物館、2002年
  - ・依田徹『近代の「美術」と茶の湯 言葉と人とモノ』思文閣出版、2013年
  - ・『茶の湯交遊録 小林一三と松永安左工門一逸翁と耳庵の名品コレクション』公益財団法人阪急文化財団 逸翁美術館、福岡市美術館、2013年
  - ・『仏教儀礼と茶—仙葉からはじまつた—』茶道資料館、2017年